

小情報共有

子規 (非管理メモ)

取扱注意 7/28 15:45
公開不可

NISA班 ← プレス対応チーム

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

東京電力株式会社

日時：平成 23 年 9 月 28 日 (水) 11:00~11:45
場所：東京電力本館 3 階大会議室
先方：記者 20 名 (カメラ 3 台)
当方：原子力・立地本部 [REDACTED]
原子力設備管理部 [REDACTED]
広報部 [REDACTED]

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (9月28日6時現在)
- ・ 当社福島第一原子力発電所 1~3号機の事故時運転操作手順書に係る報告について

[REDACTED] よりプラント状況、配付資料に関して説明。

Q. 2号機の圧力容器下部の温度が午後にも 100℃を下回りそうだが、炉心スプレイ系からの注水と注水量を増やしたことのどちらの方が効果的だと考えているか。

A. 炉心スプレイ系からの注水はシュラウドの内側を水が通るため、原理的には炉心スプレイ系の方が給水系よりも効果が大きいと考えているが、3号機と比較して2号機は温度の下がり方が緩やかなため、炉内の状況が異なっているものと推測している。炉心スプレイ系からの注水と注水量の増加の2つの効果により温度が低下していると考えている。

Q. 3号機は炉心スプレイ系からの注水により温度の低下が大きかったが、2号機に関しては

A. 2号機は炉心スプレイ系からの注水量を 1 m³/h ずつ増やしたということもあり、顕著に炉心スプレイ系からの注水の効果が出たことを確認できていないものの、全体としての流量が増えたことも加わっての、全体の効果として温度の低下につながったのではないかと考えている。

Q. 2号機は現在の注水量を維持するとのことであったが、1、3号機については今後、流量を変更する予定はないのか。

A. 当面は現在の流量での注水を継続するが、流量と温度低下の相関関係がある程度わかってきているので、今後、適切な注水量を判断したい。

Q. 流量と温度低下の相関関係を見極めて判断していくということか。

A. 2号機はまだ冷却を続けているが、1、3号機についてはある程度、温度が落ち着いてきている。今後、適切な注水量を判断したい。

Q. 以前、水処理設備のサリーを10月から単独運転する予定であったが、先日の台風の影響を考慮して、今後の運用方法の見通しに変化はあるのか。

A. 今のところ目標としているタービン建屋水位 O.P.3,000 程度を維持できている状態。現在、60m³/h で汚染水処理をしているが、台風の影響が収まったことを確認できればキュリオンを停止し、サリー2系列での運転に切り替えたい。

Q. 現在の注水量を維持しても、サリーの処理量である40m³/h で対応可能判断か。

A. 地下水の流入量を考慮しても、対応可能と考えている。

Q. 本日の水素濃度測定に使用する機器のスペックは。

A. 先日使用した機器は可燃性ガスを測定するものだったが、本日使用するものは水素ガスのみを測定でき、可燃限界の上限である75%まで測定可能な機器を使用する。

Q. 水素ガスのみを測定可能とのことだが、測定方法を変えることで何かわかるのか。

A. 1点目は、前回は可燃性ガスを測定しており、その際にプロパンガス等も測定してしまっていたが、今回は純粋な水素濃度を測定することができること。2点目は、前回は配管の開口部にセンサーを近づけて測定をしたが、今回は開口部から仮設の配管にガスを通し、その中に機器を入れて濃度測定をするので、外気が混入することがなく、測定中に濃度が薄まってしまう可能性を排除できることである。

Q. 2号機の温度が100℃を下回り、注水量も継続していくとのことだが、今後の温度の動向についてどのように考えているか。

A. 現在、圧力容器下部の温度は6時間で0.3℃程度の低下傾向にある。ある程度で低下が落ち着くと思うが、具体的な見通しはわかっていない。

Q. 本日、原子力安全・保安院に提出する2、3号機の手順書について、提出はいつか。

A. 準備ができしだい提出する。午後の提出に鳴ると思うが、具体的な時間は未定。物量としては厚さ5センチのものが5冊。

Q. 1号機の提出を先駆けて、2、3号機の提出を後回しにしたのはなぜか。

A. 保安院の指示によるものである。

Q. 水素濃度の測定を配管の出口部分とする予定とのことだが、水素は配管内で局所的に溜まっている可能性もあるため、配管全体の測定は可能なのか。

A. 配管全体の測定は難しいと考えている。水素は軽い気体であるため、配管の上部に溜まっている可能性はあると思う。配管内のほとんどが水素だとすると、圧力で押し出された水素が出口部分で測定できると思うが、測定箇所が1番高い箇所から約4m下であるため、そこである程度の値が測定できれば内部の水素が多いと判断できると思う。

Q. 最初の測定時と同じ2カ所で測定するのか。

A. その通り。

Q. 水素ガス濃度が高ければ、早急な窒素パージが必要と思うがどうか。

A. 今回、水素濃度の測定ができれば、窒素ガスの封入をし、内部の水素を大気に放出したいと考えている。

Q. 水素濃度が検出されるような、同様の箇所の抽出はしているのか。

A. 現在、格納容器内の気相部に出口がある配管について洗い出しを行っている。格納容器ガス管理システムを接続する箇所についての測定は行うが、線量等の問題もあるため、全ての箇所での水素濃度調査について決定したことはない。

Q. 格納容器ガス管理システムに再結合装置はつけないのか

A. 再結合装置をつける予定はない。水素ガスを計測できる装置は設置する予定である。

Q. そもそも、どういうきっかけで水素濃度を測定することになったのか。

A. 配管をハンドソー等で切断することになっていたのですが、中に万が一水素があれば着火の可能性があるので、測定したものだと思うが、詳細は確認する。

Q. 前回の給水系の配管切断の時はそういった発想はなかったのか。

A. 給水系で配管であり、水素が流れ込むことはないと判断し、測定しなかった。

Q. 今回のスプレイ系自体も本来は水の流れる配管であるが、どのタイミングで配管内が気相状態になっていることを把握したのか。

A. 設計上はMO12弁の所までは水封されることになっている。そこまでは気相の状態のため、MO12弁までは気相状態になる可能性はある。今回の切断作業においてどの程度まで把握していたのかについては確認する

Q. 今後の作業時の注意点や、対策等の基準は。

A. 今後、格納容器に突き刺さっている配管に係る作業については、内部に水素があることを考慮して作業計画を立てていくこととしており、これについては既に実施している。

以上